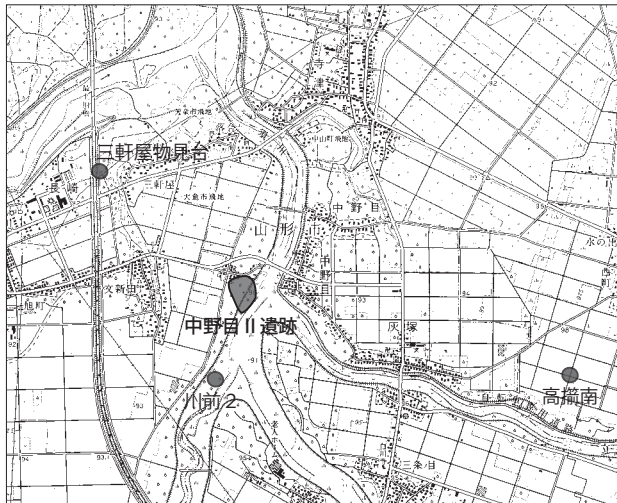


## なかのめ 中野目Ⅱ遺跡（第2次）

遺跡番号 201-135  
調査回数 第2次  
所在地 山形県山形市大字中野目  
北緯・東経 38度15分19秒・140度20分01秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所  
起因事業 須川河川改修事業  
調査面積 3800㎡  
受託期間 平成30年4月1日～平成31年3月31日  
現地調査 平成30年5月21日～11月5日  
調査担当者 天本昌希（現場責任者）・安達将行・吉田満  
調査協力 山形市教育委員会・山形県村山教育事務所  
遺跡種別 集落跡  
時代 古墳時代・平安時代・近世  
遺構 竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・井戸跡  
遺物 土師器・須恵器・金属器（文化財認定箱数：23箱）



遺跡位置図（1：50,000）

### 調査の概要

中野目Ⅱ遺跡は、山形市の北西部、中山町との市境近くの須川左岸の自然堤防上に立地する。今回の調査は、須川の河川改修事業に伴い実施され、調査区は、堤防内の河川縁辺 1900㎡を上・下層の2面にわたり調査した。

### 遺構と遺物

調査区は須川の洪水に何度も見舞われたらしく、基本土層には水性堆積を示す粘土層と砂層が縞状に堆積している様子が確認できる。現地表の標高は、93.4mほど、遺構確認面は、上層で92m前後、下層は90.8～91.8

mで、南側ほど深くなる。

基本土層は、調査区全面に鈍い黄褐色の細粒シルト層が厚く堆積し、その下は粘土質シルト層で黒褐色と黄褐色の層が数十cmほど交互に堆積を繰り返す状態が3回確認できる。黒褐色層の形成は、植物腐食等によるものと考え、地表面であったときに堆積したもの。黄褐色層は河川氾濫により運ばれてきた土が堆積したものと考えられる。よって黒褐色層を生活面、その下の黄褐色層を遺構確認面として調査している。最下層から遺構は検出されず、上の2層に限られる。

検出した遺構は、上層で竪穴建物跡1棟、土坑38基、溝状遺構8条、下層で竪穴建物跡4棟、掘立柱建物跡1棟、土坑54基、溝状遺構2条である。

竪穴建物としたST53は、上層の南部で検出したもので、カマドや炉跡などは検出されなかったが、中央に煤のつく川原石が据えられるなど、工房的な性格をうかがわせる。遺物は多くはないが、平安時代のものであろう。

ST90 竪穴建物は、下層の中央部で検出した竪穴建物で、小型の隅丸方形を呈する、僅かな焼土痕跡を残すが、カマドなどは検出できない。底面から回転糸切りの須恵器環が出土しており、平安時代のものと判断できる。

ST99A 竪穴建物は、下層の調査区北端で検出し、北

半部は大きな削平により失われているため調査区外となっている。竪穴中央に炉を持ち、平面形は判然としませんが、1辺4.5m程度の方形になると思われる。大量の遺物が出土しており、土師器の高坏、小型壺、甕を主体とする。口縁部を欠くものの須恵器<sup>はそう</sup>甕も出土している。古墳時代中期の前葉のものと同判断できよう。

ST100 竪穴建物は、下層の調査区北側で検出している。中央に炉をもつが、被熱痕跡は弱い。周溝が巡り、1辺7.7mほどの方形を呈する。出土遺物は土師器の高坏、小型壺、甕を主体とする。先のST99Bと同じく、古墳時代中期前葉のものだろう。

ST101 竪穴建物は、下層の調査区中央の西側で検出している。中央に径40cm程度の炉が検出し、外側にテラス状の掘り込みが広がる。これらの周辺からは、多くの鉄滓<sup>てつさい</sup>が出土しており、さらに覆土を水洗したところ、多数の鍛造剥片を得ることができた。また、高坏脚部を転用した羽口片も多く出土する。このような状況から、本遺構は鍛冶工房としての性格をもつ竪穴建物と考えられる。全体の規模は、東壁以外に周溝が巡り、7.8×7mほどの長方形を呈する。出土遺物はST99Aなどと同じで、古墳時代中期前葉と思われる。

SB120 掘立柱建物は、上層の中央部西側で検出している。2間2間だが南北方向に長く、柱間は東西でおよそ1.8m程度、南北で2.1m程度で規格的な印象を受ける。出土遺物は僅かだが、平安時代のものと思われる。

土坑は、強い被熱痕跡が残される浅いものが数基あるほかは、総じて掘り込みが深いものである。前者は上層のみで検出され、骨片が出土するものもある。土坑の大半を占める後者は、方形、長方形、円形のものがあり、上下両層で検出する。これらの多くは規格的な平面形で、壁面は垂直に立ち上がる。これらは現代の農業に伴う掘削痕のようにも思えるが、それを示すような痕跡や遺物は得られていない。また、調査区全体に厚く堆積する細粒シルト層の下から掘り込まれているため、この層が堆積する前に形成されたものである。これらを踏まえれば、単純に現代の攪乱として捨て置く訳にはいかないだろう。円形のものに関しては、素掘りの井戸跡の可能性もある。それ以外のものについては用途不明であり、遺物の出土も少なく、遺構に帰属するものか判断できない。須恵器片が混在していることから、上限は平安時代であ

り、それ以降のものと思われる。

溝状遺構は、調査区南側でSD60Aとした幅2m前後、断面がV字形のものを検出している。調査時の検出面は下層だが、調査区壁面で立ち上がりを確認すると、上層まで達している。調査区を東西に横断し、東端部で直角に折れ曲がる。屋敷等の区画溝のように思われるが、対辺になるものは検出しなかった。文献上にも近隣に城館の存在は知られていない。遺物は少ないが、近世のものが含まれている。

### まとめ

今回の調査で検出した3棟の古墳時代の竪穴建物について、詳細は整理作業の進展によるが、発掘段階ではすべての遺構において坏が1点も確認できず、有段の高坏などが見られることから、これらの間に大きな時期差はなく、中期前葉のものと同判断している。

ST101は鍛冶工房と判断できるもので、県内においては最古の資料となる。これまで山形市の大之越<sup>だいのこし</sup>古墳に副葬された鉄釘<sup>かなはし</sup>だけが、県内の古墳時代中期における鍛冶技術の伝播を物語る資料であったが、今回の調査では明確な利用痕跡を示す資料を得ることができた。

平安時代の遺構については、判然としないものが多いものの、確認面から平安時代の遺物は多く出土している。底径の小さい回転糸切りの須恵器坏底部片などが多く、9世紀の中～後葉のものといえよう。

近世の遺構は、断面がV字形の溝状遺構や、大型の円形土坑があり、これらには素焼きの播鉢片<sup>すりばち</sup>や瓷器片<sup>しき</sup>が含まれている。具体的な年代は、今後の整理作業に委ねられるが、近世後半以降のものであろう。

先に述べたように、黄褐色層は洪水堆積層と捉えているが、厚く堆積する場所もあれば、確認できない場所もあり、当時の微地形や洪水の方向を示しているものと思われる。遺構の検出状況と併せて調査区域の埋没状況を整理すると、最下の洪水層の下にある黒色層からは遺構が検出していないため、時期は特定できないが、この段階では無人だったと考えられる。この後、古墳時代中期前葉から利用が始まり、垂直に掘り込まれる土坑を利用して平安時代以降の時期に、もう一度洪水層が形成されている。そこから近世後半以降に、これまでのものよりもはるかに規模の大きい洪水層が形成され、現地表面となっていると解釈している。

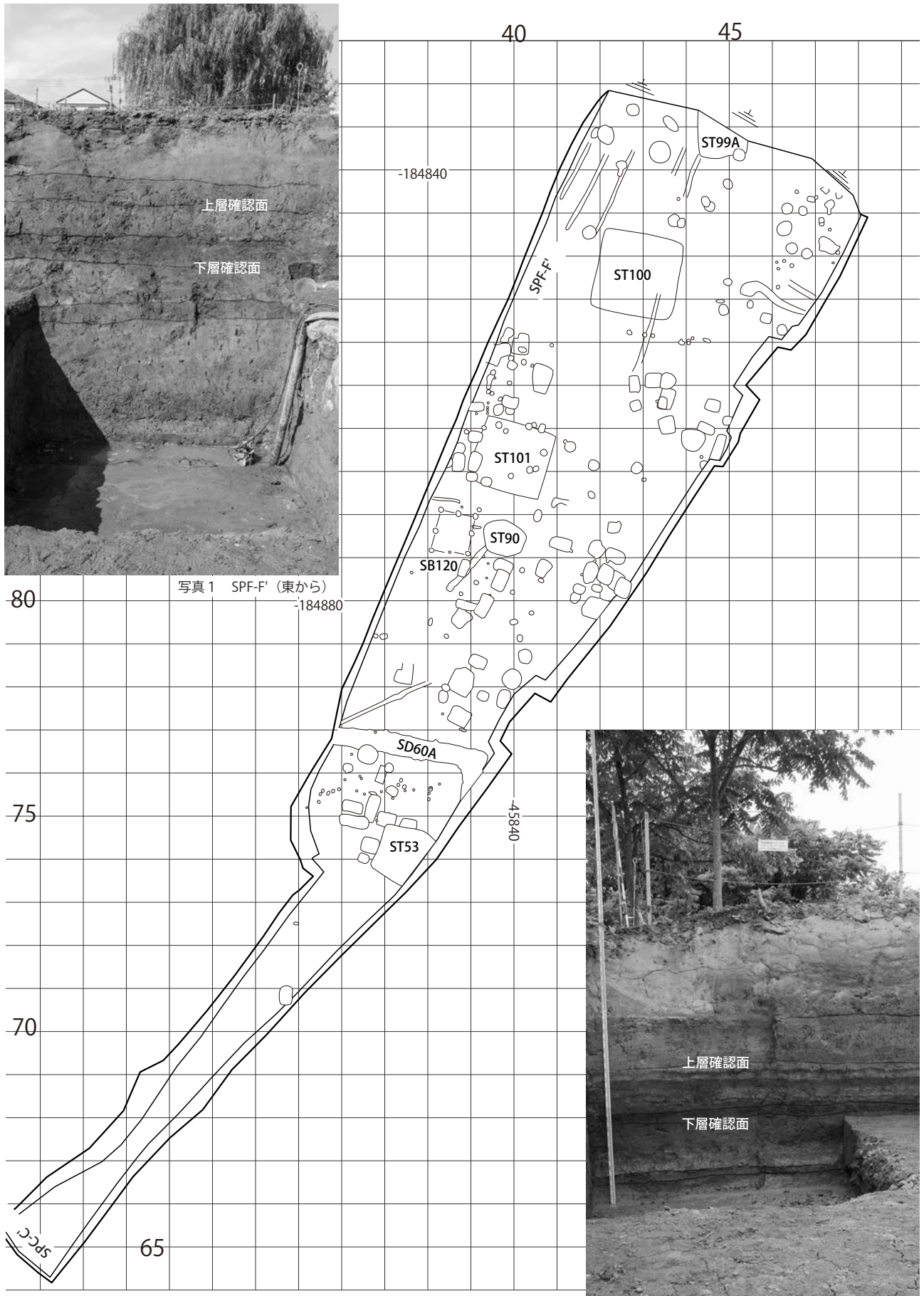


図1 遺構配置図

写真2 SPC-C' (北から)





写真3 ST99 竪穴建物（北から）



写真4 ST99 竪穴建物遺物（遺物出土状況）



写真5 ST99 竪穴建物出土遺物（有段高坏）



写真6 ST99 竪穴建物出土遺物（須恵器甕）



写真7 ST99 竪穴建物炉跡検出状況（東から）



写真8 ST100（手前）、ST99（奥）竪穴建物（南から）



写真9 ST100 竪穴建物（南東から）



写真10 ST100 竪穴建物遺物出土状況（南東から）





写真11 ST101 竪穴建物（東から）



写真12 ST101 竪穴建物炉跡検出状況（東から）

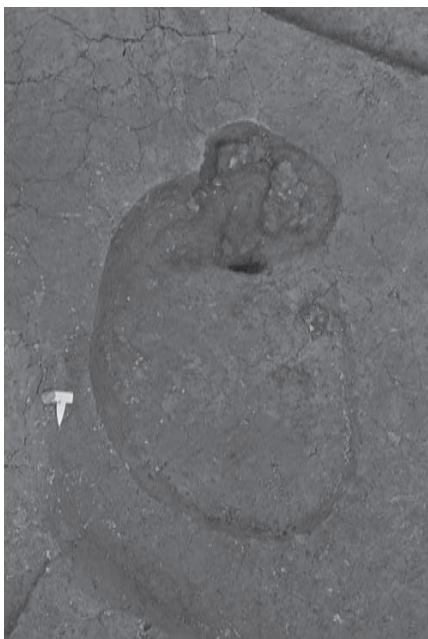


写真13 ST101 竪穴建物炉跡オルソ合成画像（南から）



写真14 ST101 竪穴建物出土土転用羽口



写真15 ST101 竪穴建物出土土転用羽口



写真16 ST101 竪穴建物出土鉄滓

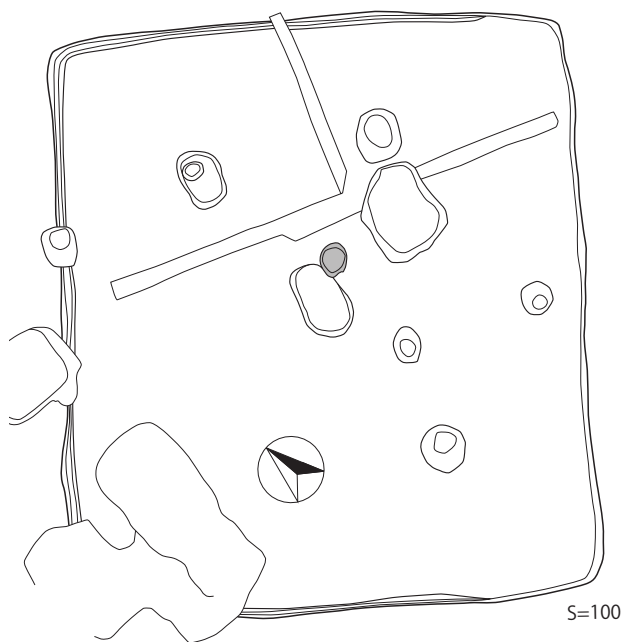


図2 ST101竪穴建物平面図（網掛け部が炉跡）

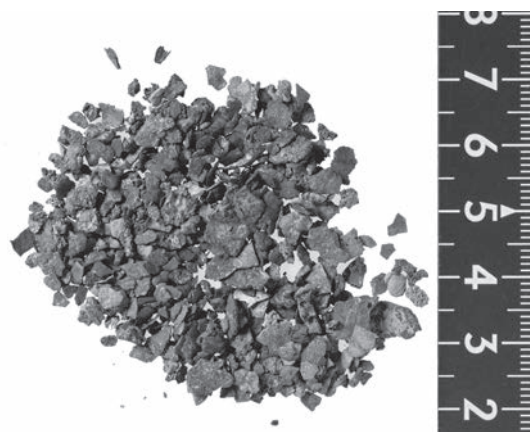


写真17 ST101 竪穴建物出土鍛造剥片





写真18 ST90 竪穴建物（東から）



写真19 SB120 掘立柱建物（西から）



写真20 ST53 竪穴建物（奥）と、規格的な土坑（SK46-52）（西から）



写真21 被熱痕跡をもつ土坑（SQ10）（西から）



写真22 円形の土坑（SK116）（西から）



写真23 SD60A 溝状遺構（東から）



写真24 洪水層からの遺物出土状況（東から）



写真25 調査区空撮（中央を流れるのが須川）（北から）